

リベラルアーツとしての会計学

－私が考える教養教育－

2014年8月3日オープンキャンパス模擬授業

石川純治

- 1 「T字」と教養－高校教育と大学教育
専門と教養との関係：タテとヨコ、T字のイメージ
教養とヨコ学習、横断的理解の大切さ
各専門の土台に、語学学習（リテラシー）は真の教養教育でない
- 2 「学びて思わざる」の危険な学習－高校での学習との違い （資料1）
単なる知識の獲得でない、何のための知識（知的な道具）
「思う」こと（問題意識）の大切さ、本当に理解するとは
- 3 「見えるもの・見えないもの・見せているもの」という見方－形態化
H₂Oのたとえ：構造（H₂O）－形態化（？）→形態（仮態、姿態：水・氷・水蒸気）
肉眼で見える形態（仮の姿）から、見えない構造へ
「かんじんなことは、目には見えないんだよ」（名作から）
- 4 「とらわれない」ということ－相対化の力 （資料2）
相対化とは、今住んでいる世界・見ている世界を広げること
常識や通念にとらわれない力、「執着（心）」から離れる
東京スカイツリーから何が見えるか、俯瞰するという事
- 5 「史的俯瞰」ということ－歴史のなかで （資料3）
物事を歴史の文脈でとらえる
歴史知識から史的相対化へ、今を歴史の中で位置づける
- 6 フクシマと水俣と沖縄－つなぐものの眼
それぞれ別個の問題？ 共通するもの（ヨコ学習）
社会構造への批判的視点をつちかう
- 7 教養としての会計学－会計学教育への私の姿勢
その1：複式簿記の相対化－単式・複式・3式という見方
その2：複式簿記への賞賛の言葉－各分野からの賞賛の意味
：（ゲーテ、ケイリー、ゾンバルト、シュンペーター）
※自然科学＋社会科学＋人文科学＝総合科学性 →「教養」

〈資料1〉「学びて思わざればくらし」－「思う」ことの大切さ

「学びて思わざればくらし」という有名な孔子の言葉が浮かんできます。加藤周一は『学ぶこと思うこと』（岩波ブックレット）という本のなかで、この「思う」ことを次のように非常にかわりやすく説明しています。引用しましょう。

「教師が教えてくれるから学ぶのではない。個人が自分自身で問題を考えていて、その問題を解くために知識が必要だから学ぶのです。そのとき、知識は「知的な道具」に転化されるわけで、自分の見つけた問題を、その道具を使って解こうとするのです。「これが問題だ」と感じることに、これを日本語では「問題意識」といいます。ある問題意識が自分のなかにもあり、そのことについてよく考えること、これが「思う」ことです」。

さらに続けて、「それは確かに（外から－引用者）与えられたものではなくて、自分のなかから出てきた問題意識です。それがないと本当の意味でものごとを理解することにならない」（以上6-7ページ）と。

卒業生へのメッセージ（09年3月25日、卒業式にあたって）

〈資料2〉相対化とリベラルアーツ－真の教養とは

特に強調したいのは、常識とか通念といったものにとらわれない力、とりわけその「とらわれない」ということの大切さです。逆にいえば、（暗黙に）「とらわれている」ことから解き放すこと、これが「学問」することの意義といえます。本書全体を貫いている「相対化の力」も、そのためにこそあります。

『簿記学対話 複式簿記のサイエンス』あとがき

①相対化→ ②とらわれない→ ③本当の「自由」（リベラル）

→ ④その術（すべ、アーツ）＝リベラルアーツ（教養教育）

→ ⑤教養としての（会計）学

〈資料3〉「教養」としての会計学－たかが会計、されど会計

ここでいう「教養」（culture、bildung）とは、カルチャーセンターなどに通って身につけるようなものでもなければ、むろん豊富な知識を披露するといったことでもありません。また、何かの役に立つというものでもありません。なぜなら、真の「教養」は、もっと「生き方」に深くかかわるものでなければならないと考えているからです。

（中略）

こうした「教養」にとって、物事を歴史の文脈でとらえることはたいへん重要な学習姿勢といえます（この点は、あとの章で触れます）。何といても歴史には生き生きとしたひとの営みがあります。そこにはダイナミックな社会がでてきます。歴史の眼は、まさに「社会の中で自己の位置」を知るための見通しや洞察を与えてくれます。

『社会のなかの会計』（NHK出版）コラム1

4. 構造と形態の見方－サイエンスの眼

3つのレベル

- ① 変わらぬもの(構造) : 見えないもの(構造)
- ② 変わるもの(形態) : 見えるもの(形態)
- ③ 変えているもの(契機) : 見せているもの(契機)



3. 三式簿記への招待

▶ 「二式簿記」と呼ばれていたら ◀

- マイナス1次元とプラス1次元



- 相対化の視点

単式 → 複式 ← 三式

複式簿記への賞賛－複式簿記とは何か

ゲーテ

「商人は複式簿記によってどれほど多くの利益を得ていることだろうか。あれこそは**人類の最高の発明**のひとつだ」

ケイリー

「複式簿記の原理はユークリッドの比の原理に匹敵する**絶対的な完全原理**である」

ゾンバルト

「複式簿記なくして**資本主義**というものを考えることはできない」

シュンペーター

「複式簿記こそは高くそびえるその**記念塔**である」

リベラルアーツとしての会計学
—大学の教養教育とは—私が考える教養教育—

2014年8月3日オープンキャンパス模擬授業

石川純治

- 1 「T字」と教養—高校教育と大学教育
専門と教養との関係
教養とヨコ学習、横断的理解の大切さ
各専門の土台に、語学学習（リテラシー）は真の教養教育でない
- 2 「とらわれない」ということ—比較相対の大切さ（資料1）
相対化とは、今住んでいる世界・見ている世界を広げること
常識や通年にとらわれない力をつちかう
東京スカイツリーから何が見えるか、俯瞰するという事
- 3 「見えるもの・見えないもの・見せているもの」という見方—形態化
H₂Oのたとえ
構造（H₂O）—形態化（？）→形態（姿態：水・氷・水蒸気）
肉眼で見える形態（仮の姿）から、見えない構造へ
- 4 「学びて思わざる」の危険な学習—高校での学習との違い（資料2）
単なる知識の獲得でない、何のための知識（知的な道具）
「思う」こと（問題意識）の大切さ、本当に理解するとは
- 5 「史的俯瞰」ということ—歴史のなかで（資料3）
物事を歴史の文脈でとらえる
歴史知識から史的相対化へ、今を歴史の中で位置づける
- 6 フクシマと水俣と沖縄—つなぐものの眼
それぞれ別個の問題？ 共通するもの（ヨコ学習）
社会構造への批判的視点をつちかう
- 7 教養としての会計学—会計学教育への私の姿勢
例1：複式簿記の相対化—単式・複式・3式という見方
例2：先人の複式簿記への賞賛の言葉—各分野からの賞賛の視点の意味
自然科学+社会科学+人文科学

〈資料1〉「学びて思わざればくらし」－「思う」ことの大切さ

「学びて思わざればくらし」という有名な孔子の言葉が浮かんできます。加藤周一は『学ぶこと思うこと』（岩波ブックレット）という本のなかで、この「思う」ことを次のように非常にかわりやすく説明しています。引用しましょう。

「教師が教えてくれるから学ぶのではない。個人が自分自身で問題を考えていて、その問題を解くために知識が必要だから学ぶのです。そのとき、知識は「知的な道具」に転化されるわけで、自分の見つけた問題を、その道具を使って解こうとするのです。「これが問題だ」と感じることに、これを日本語では「問題意識」といいます。ある問題意識が自分のなかにもあり、そのことについてよく考えること、これが「思う」ことです」。

さらに続けて、「それは確かに（外から－引用者）与えられたものではなくて、自分のなかから出てきた問題意識です。それがないと本当の意味でものごとを理解することにならない」（以上6-7ページ）と。

卒業生へのメッセージ（09年3月25日、卒業式にあたって）より

〈資料2〉相対化とリベラルアーツ－真の教養とは

特に強調したいのは、常識とか通念といったものにとらわれない力、とりわけその「とらわれない」ということの大切さです。逆にいえば、（暗黙に）「とらわれている」ことから解き放すこと、これが「学問」することの意義といえます。本書全体を貫いている「相対化の力」も、そのためにこそあります。

『簿記学対話 複式簿記のサイエンス』あとがき

①相対化→ ②とらわれない→ ③本当の「自由」（リベラル）

→ ④その術（すべ、アーツ）＝リベラルアーツ（教養教育）

→ ⑤教養としての（会計）学

〈資料3〉「教養」としての会計学－たかが会計、されど会計

ここでいう「教養」（culture、bildung）とは、カルチャーセンターなどに通って身につけるようなものでもなければ、むろん豊富な知識を披露するといったことでもありません。また、何かにすぐに役立つというものでもありません。なぜなら、真の「教養」は、もっと「生き方」に深くかかわるものでなければならないと考えているからです。

（中略）

こうした「教養」にとって、物事を歴史の文脈でとらえることはたいへん重要な学習姿勢といえます（この点は、あとの章で触れます）。何といっても歴史には生き生きとしたひとの営みがあります。そこにはダイナミックな社会がでてきます。歴史の眼は、まさに「社会の中で自己の位置」を知るための見通しや洞察を与えてくれます。

『社会のなかの会計』（NHK出版）コラム1より

〈資料1〉 相対化とリベラルアーツ—真の教養とは

特に強調したいのは、常識とか通念といったものにとらわれない力、とりわけその「とらわれない」ということの大切さです。逆にいえば、(暗黙に)「とらわれている」ことから解き放すこと、これが「学問」することの意義といえます。本書全体を貫いている「相対化の力」も、そのためにこそあります。

『簿記学対話 複式簿記のサイエンス』あとがき

①相対化→ ②とらわれない→ ③本当の「自由」(リベラル)

→ ④その術(すべ、アーツ) = リベラルアーツ(教養教育)

→ ⑤教養としての(会計)学

〈資料2〉 「学びて思わざればくらし」—「思う」ことの大切さ

「学びて思わざればくらし」という有名な孔子の言葉が浮かんできます。加藤周一は『学ぶこと思うこと』(岩波ブックレット)という本のなかで、この「思う」ことを次のように非常にわかりやすく説明しています。引用しましょう。

「教師が教えてくれるから学ぶのではない。個人が自分自身で問題を考えていて、その問題を解くために知識が必要だから学ぶのです。そのとき、知識は「知的な道具」に転化されるわけで、自分の見つけた問題を、その道具を使って解こうとするのです。「これが問題だ」と感じることに、これを日本語では「問題意識」といいます。ある問題意識が自分のなかに入り、そのことについてよく考えること、これが「思う」ことです」。

さらに続けて、「それは確かに(外から—引用者)与えられたものではなくて、自分のなかから出てきた問題意識です。それがないと本当の意味でものごとを理解することにならない」(以上6-7ページ)と。

卒業生へのメッセージ(09年3月25日、卒業式にあたって)より

〈資料3〉 「教養」としての会計学—たかが会計、されど会計

ここでいう「教養」(culture、bildung)とは、カルチャーセンターなどに通って身につけるようなものでもなければ、むろん豊富な知識を披露するといったことでもありません。また、何かにすぐに役立つというものでもありません。なぜなら、真の「教養」は、もっと「生き方」に深くかかわるものでなければならないと考えているからです。

(中略)

こうした「教養」にとって、物事を歴史の文脈でとらえることはたいへん重要な学習姿勢といえます(この点は、あとの章で触れます)。何といても歴史には生き生きとしたひとの営みがあります。そこにはダイナミックな社会がでてきます。歴史の眼は、まさに「社会の中で自己の位置」を知るための見通しや洞察を与えてくれます。

『社会のなかの会計』(NHK出版)コラム1より

私が考える教養教育 ーリベラルアーツとはー

石川純治

- 1 「T字」と教養ー高校教育と大学教育
- 2 「とらわれない」ということー比較相対の大切さ
- 3 「見えるもの・見えないもの・見せているもの」という見方ー形態化ということ
- 4 「史的俯瞰」ということー歴史のなかで
- 5 「学びて思わざる」の危険ー高校での学習との違い
- 6 教養としての会計学ー会計学教育への私の姿勢

〈資料1〉相対化とリベラルアーツー真の教養とは

特に強調したいのは、常識とか通念といったものにとらわれない力、とりわけその「とらわれない」ということの大切さです。逆にいえば、(暗黙に)「とらわれている」ことから解き放すこと、これが「学問」することの意義といえます。本書全体を貫いている「相対化の力」も、そのためにこそあります。

『簿記学対話 複式簿記のサイエンス』あとがき

①相対化→②とらわれない→③本当の「自由」(リベラル)→④その術(すべ:アーツ)
=リベラルアーツ(教養教育)→⑤教養としての会計学

〈資料2〉「教養」としての会計学ーたかが会計、されど会計ー

ここでいう「教養」(culture、bildung)とは、カルチャーセンターなどに通って身につけるようなものでもなければ、むろん豊富な知識を披露するといったことでもありません。また、何かのすぐ役に立つというものでもありません。なぜなら、真の「教養」は、もっと「生き方」に深くかかわるものでなければならないと考えているからです。

(中略)

こうした「教養」にとって、物事を歴史の文脈でとらえることはたいへん重要な学習姿勢といえます(この点は、あとの章で触れます)。何と云っても歴史には生き生きとしたひとの営みがあります。そこにはダイナミックな社会がでてきます。歴史の眼は、まさに「社会の中で自己の位置」を知るための見通しや洞察を与えてくれます。

『社会のなかの会計』（NHK出版）コラム1より

〈資料2〉「教養」としての会計学¹—たかが会計、されど会計—

ここでいう「教養」(culture、bildung)とは、カルチャーセンターなどに通って身につけるようなものでもなければ、むろん豊富な知識を披露するといったことでもありません。また、何かにすぐに役立つというものでもありません。なぜなら、真の「教養」は、もっと「生き方」に深くかかわるものでなければならぬと考えているからです。

この点で、「世間論」でよく知られた阿部謹也は教養のある人を、『世間』の中で『世間』を変えてゆく位置にたち、何らかの制度や権威によることなく、自らの生き方を通じて周囲の人に自然に働きかけてゆくことができる人（傍点は引用者）と定義しました²。じっくり味わいたい言葉です。

会計学が、可能ならばそうした「教養」の定義に少しでもかかわるものであってほしい。まさに「言うは易く、行ふは難し」ですが、これがずっと願ってきた、また欲してきた会計学なるものへの姿勢です。言い換えれば「たかが会計、されど会計」、その「されど会計」への切実な思い入れと葛藤です³。

阿部は続けて、「個人は学を修め、社会の中で自己の位置を知り、その上で『世間』の中で自分の役割をもたねばならないのである」（傍点は引用者）と述べています。ここに、何のために学を修めるかが明確に示されています。ビジネスのスキルとしての会計学習だけでは、ここでいう「学を修める」ことにはつながらないといえるでしょう。

こうした「教養」にとって、物事を歴史の文脈でとらえることはたいへん重要な学習姿勢といえます（この点は、あとの章で触れます）。何といても歴史には生き生きとしたひとの営みがあります。そこにはダイナミックな社会がでてきます。歴史の眼は、まさに「社会の中で自己の位置」を知るための見通しや洞察を与えてくれます。

「世間」を変えてゆく位置にたち、何らかの制度や権威によることなく、自らの生き方を通じて周囲の人に自然に働きかけてゆくための会計学、もしこのことが可能ならそれを目指してみたいものです。

¹ 本コラムは石川純治・齋藤正章『現代の会計』（放送大学教育振興会、2008年）のコラム1「『教養』としての会計学」に基づいています。

² 『「教養」とは何か』（講談社現代新書、1997年）180頁。この本では、「世間」と「教養」とを不可分の関係として捉えている点が重要なところです。

³ 筆者のホームページ「講演コーナー」での「会計研究のアンビバレンス—たかが会計、されど会計—」（2004年、慶應義塾大学）を参照。

石川純治『簿記学対話 複式簿記のサイエンス』あとがき—(税務経理協会、2011年)—より

テキストでの「簿記学対話」を通して、「相対化の力」をつちかってもらふこと、そしてその力でもって複式簿記の根底にあるもの(真の姿)、すなわち「複式簿記とは何であるか」とともに「何でありうるか」にもせまることができればと思います。

端的には、「複式簿記のサイエンス」を求めてです。

- 1 「T字」と教養—高校教育と大学教育
- 2 「とらわれない」ということ—比較相対の大切さ
- 3 「見えるもの・見えないもの・見せているもの」という見方—形態化ということ
- 4 「史的俯瞰」ということ—歴史のなかで
- 5 「学びて思わざるは—」—高校での学習との違い
- 6 教養としての会計学—私が目指す会計学教育の姿勢— 会計学教育への私の基本姿勢